



■今、市民を幸せにできるのはランドスケープだよ



いつのまにか、ランドスケープの仕事をしだしてから40年も経った。その間、自分の中でランドスケープへの意識が随分変わってきたように思う。ただし、私の場合は一貫して造形ではなく、空間づくりにかけてきた事を誇りに思う。

卒業して2年半ほどで独立したために、当初は仕事をやりながらの勉強で、実施設計のディ

テールの書き方や積算などがほとんど解かっておらず、樹木の知識も知れたもので、役所でも恥のかきどうしであった。従って、当時の意識は空間を造るためとはいえ、ディテールデザインに集中していた。擁壁のいろんなデザインを集めたり、独立樹を探して並木の写真を取り捲ったりした。当然ながら、ハードエンジニアリングに詳しい人が立派な技術者に思えた。土木は造園より偉かった。

つぎに、ニュータウンの仕事を通して都市計画屋が偉く見え、自分の意識もディテールから空間構成や都市構造へと変わっていった。

ここで、私にとって大事な転機があった。通常なら都市計画屋と一緒にあって、カッコいい都市広場に目を向けるところであるが、私は柔らかい自然風な空間の再生に向かったのだ。樹木は独立樹ではなく多様に混在するものだとか、水は地中にも流れているのだとか、私のランドスケープの中心になった。そして、ニュータウン区域を超えて地域全体に意識を向けることによって、造園は都市計画よりも偉いんだと思えるようになった。

その後、何事にも楽しむことの好きな私は、街や自然を楽しんでいる人、即ちユーザーに興味をもち始めた。当時、外国へ行くことが多かったことにも大いに関係している。それによって、私のサービス精神が大いに向上した。ユーザーの実態を見ることによって、啓蒙、啓発、教化などという公用語がそらぞらしく思えた。同時に、いかにユーザーを幸せするかというはっきりした目標を得て、ランドスケープの仕事がとてもやりやすくなった。

単純な経済性や機能では測れないゆとりの幸せ、それがいま求められているのです。これからはランドスケープが一番偉くなる時代です。

大塚守康

(株)ヘッズ代表取締役

1942年生まれ。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)、技術士(建設部門)。67年(株)大塚造園設計事務所(現 ヘッズ)設立、現在に至る。また、千里・多摩・泉北・八王子ニュータウン、大阪花博、国際園芸博、淡路花博、浜名湖花博など国内外にわたって多数のプロジェクトに従事。99年『黄綬褒章』受賞
04年より社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 会長